

第30回 障害者による書道・写真全国コンテスト 審査総評

書道部門

第30回を迎える障害者による書道・写真全国コンテストは、総応募数1199点中書道部門は971点と過去最高の応募数でした。

書は日常生活に密着しています。それだけに安易でもあり難しい所でもあります。視覚で捉え、墨や筆で用紙に記する、その際文字の配置、線の強弱や太細などなど種々の課題が山積しています。落筆の高さを取る腕の上下動、直線を引く腕の水平運動、払いを行う円運動など全身を活用する動きが作品に生き生きとした生命力を吹き込みます。このように手軽にリハビリのできる所に書の特性があると思われまます。仕上げた作品を冷めた目で確かめる。その際文字の形は重要では無いのです。線に勢いや艶がある作品。想像力を掻き立てられる作品など観照する者に感動を与える作品が良い作品となります。

今回上位の作品は書的にも大変優れた作品が揃いました。日頃真剣に取り組んだ勝利です。又周囲の方々の熱い思いも感じられました。一層努力を重ね心身に高みを目指して下さい。

渡部 會山（創玄書道会審査会員、毎日書道展審査会員）

写真部門

その昔、撮影、露出、現像、プリントはむづかしい「技術」で、それをこなせるのが「プロ」で、いわば「特権」の上に住んでいたわけです。そしてデジタルの時代がやってきて、若いコンピューター世代が軽々と技術をこなし、一挙に表現が多様化して、年寄りの間に動揺がはりました。

パソコンアレルギーの人はフィルムに立て籠もり、柔軟な人は年齢に関係なく、今までのフィルムの表現の上にデジタルの表現をプラスして新しい境地を開いたのです。そこに携帯写真が加わり、よりワイドな展開をみることになりました。

私たちのコンテストも今回で30回目です。初めの頃はフィルムで、単レンズでした。ハンディのある方たちは対象に寄ろうとしても思うままに動けず、甘い絵になって。私も「もう一步前へ」と絶えず訴えた記憶があります。

今、デジタルになって、キレのいい、手ぶれ防止のついたズームと、感度も綺麗な画調のままの高感度が日常化してきました、それに合わせて、応募作品も動きの早いスポーツから、鳥や鳥のアップ、夕景、夜景と多彩になってきました。この進化をより良い明日に向けて続けようではありませんか。

高岩 震（フリーカメラマン、日本映画撮影監督協会会員）

審査員一覧（敬称略）

渡部 會山（創玄書道会審査会員、毎日書道展審査会員）

高岩 震（フリーカメラマン、日本映画撮影監督協会会員）